

新潟市教育相談
センターだより

も え ぎ

第 107 号
令和 2 年 3 月 16 日
新潟市教育相談センター
新潟市中央区西大畑町458番地1
TEL (025) 222-8600 (代表)
FAX (025) 222-8303
E-mail:sodan.ed@city.niigata.lg.jp

令和元年度 重点取組事項について

所長 永川 幸洋

1 学校と関係諸機関の連携推進の支援

学校が関係機関（当センターを含む）と連携する際に使われるのが「児童生徒理解・教育支援シート」です。このシートは、言うまでもなく、作成や提出が目的ではなく、連携場面で実際に活用するためのものです。当センターでは、特に「具体的で短期的な目標」の設定と「現実的な役割分担」の記載に努めています。目標が具体的かつ短期的であるほど、学校や関係機関は、その目標に対して、自分たちに何ができるのかをイメージしやすくなり、ケース会議などでの連携がより太く明確になるからです。

2 相談センターの組織的支援の推進

生徒指導上の諸問題に対して、学校の組織的対応の徹底が求められていますが、これはなにも学校に限ったことではありません。当センターでは、これまで相談者に対して担当者による一貫支援を原則としていました。これを、今年度途中より、相談依頼を受けたら、まず、主任や副主任がインテーク（初期面談）を行い、相談者が何を訴え、何を求めているのか十分聞き取った上で、臨床心理士を加えた部内カンファレンス（協議）で、センターとしてのア

セスメント（見立て）を立てるようにしました。その上で、教育相談部、訪問相談部、適応指導部、夜間学習部さらに特別支援教育サポートセンターなどの当機関の力を最大限に活かした支援を提供できるようにしました。

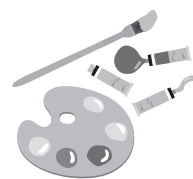
3 不登校に関する新通知への対応

昨年10月の文科省通知「不登校児童生徒への支援の在り方」では、センターなどの学校外の機関で相談や指導を受ける場合の出席扱いとなる要件が、「学校復帰を前提とする」から「社会的自立を目指す」に改訂されました。そのため、不登校児童生徒が自らの進路を主体的に捉えることが可能となるよう「当該施設での学習の評価を適切に行い指導要録に記入する」ことがより重要になってきました。

そこで、当センターでは、昨年度より、通室中学生の定期テストについて、可能な限り在籍校の提示する条件で受験できるようにし、在籍校がより適切な評価をできるような体制を整備しました。また、今年度途中から、通室生の「学習・活動の記録」を在籍校へお伝えするとともに、在籍校の先生方にセンターへお越しいただき、活動の様子や作品を実際に見ていただけるようにしました（一部の区教育相談室では既に実施しています）。

教育相談センターでは、全ての子どもが、自分の未来に夢をもてる日がくることを目指し、今後も、子どもに寄り添う支援を続けてまいります。

も え ぎ ギ ャ ラ リ ー



教育相談部 “いつでも黒子” 遠藤 美紀

今年も、“いつでも黒子”として、相談者のみなさんのお話を聴かせていただき、一緒に考え、少しでもよりよい支援ができるように、相談部一同、日々活動して参りました。

相談部としての主な相談活動は、次のようなことをしています。

- ・相談者のお話をよく聴いて、カンファレンスをし、見立てをしています。
- ・相談者の方々の、気持ちや意思に沿って、相談を継続したり、適応指導部や夜間「学習・進路相談室」に繋げたりします。また、ニーズに応じて、特別支援教育サポートセンターや他機関に紹介したりします。
- ・元気を貯めていくために、次のような活動も用意しています。

イラストルーム、絵を描く部屋、自主学習室での自習、プレイルームでの遊び、卓球、楽器、料理、音楽鑑賞

また、必要に応じて、学校とのケース会議や校内研修のお手伝いも行いました。

黒子の私たちにとって、相談者の方々が少しでも気持ちが楽になった、元気が出てきた、笑顔になれたなどが何より大切なことです。そして、いつかは、相談していたことも忘れ、日々を過ごしていただくことが一番です。これからも、相談部一同、“いつでも黒子”としてより一層、努めて参りますので、よろしくお願い申し上げます。



**今年度の
相談・支援活動
を振り返って**



適応指導部 一人一人の確かな成長を 松島 慎一郎

- ・音楽発表は今までの練習も含めて一番よいパフォーマンスができたと思う。接客の時も、最初は不安だったけど、しっかりお客様への受け答えができたと思う。
- ・普段話してなかった人とこれをきっかけにかかわることができたし、コツコツやっていたことが実った時の感覚を知ることができた。自分からてきばきと動くことの楽しさを知った。

上記は、1月31日に実施された当センターの作品展での、通室生の振り返りの記述の一部です。作品展当日は、学校関係者からも数多くの参加をいただき、通室生の作品展示や音楽発表等の活動の様子を見ていただきました。

不登校状態にある子どもたちの学校復帰に向けた学習支援や体験活動、教育相談を行い、学校復帰や社会的自立を促す働き掛けをすることが、適応指導部の大切な役割の一つです。今年度も、様々な活動を通して、「自己決定すること」や「人、もの、ことにかかわる活動」を多く計画・実施してきました。子どもたちが、一步前に踏み出す心のエネルギーや子ども自身の力を高めていくことができるように、今後も適応指導部が一体となって支援・相談活動に努めていきます。



訪問教育相談部 登校につながるよう支援 熊谷 博純

訪問教育相談は、なかなか学校に通うことができない児童生徒宅を訪問し、話をしたり一緒に遊んだりすることを通して当該の児童生徒が元気になり、登校につながっていくことを目指しています。

今年度は特に、正式な申請書類を出さずに体験できる「お試し訪問相談」を広くお知らせした結果、その依頼も多くあり、より早めに訪問できたと思います。

その中で多くの児童生徒の変容・成長を見ることができました。目標を立て寝る時刻が早くなったり、友達と外出する機会が増えたり、パソコンのローマ字入力をマスターしたくてアルファベットの学習を始めたり、毎週金曜日放課後に登校するようになったりするなど様々な姿を見ることができました。

特に中学校3年生については卒業を意識していることあるのでしょうか、変容は大きいように思います。自分の力で登下校を始めたり、学校の適応教室で先生と話をするようになったりとこれまでより何段階も進んだ姿が見られた生徒もいました。

一方で訪問してもなかなか会えない場合もあります。そんな時は、保護者の方から様子を聞いてメッセージを預けたり、手紙を郵便受けに入れたりして本人に届くようにしています。

これからも訪問教育相談を通して、学校を休みがちな児童生徒が心にエネルギーを蓄え、登校に向けて動き出すことができるよう支援して行きます。

夜間「学習・進路相談室」 1年間を振り返って 金子 裕二

夜間の学習が終わった生徒を玄関で見送るとき、「今日は、彼（彼女）に励ましの言葉や、勇気付ける言葉を、しっかり伝えることができたのか。」と思います。

不登校の生徒に接してみると、性格も良く、とても優しい生徒や、学習能力の高い生徒が多いです。中には、他の人には、まねのできない特技や能力をもっている生徒もいます。

生徒と学習をしながら、時々、色々な話をしました。生徒が今、興味をもってやっていることを、楽しそうに話してくれた時は、私も、うれしくなり、「いいねえ。」と言って、「将来、好きなことを目指していくと、必ず、自分がその目標に近づいていくよ。」と話を続けました。生徒にとっては、大きな年齢差のせいもあってか、素直に聞いてくれていたようでした。そして、「今、苦勞している分は、必ず自分の力になるよ。だから、何かやるとき、これからの時間は、自分にとっては、特別な時間なんだと思って、やってみよう。すると、本当に力が湧いてくるよ。」と、付け加えました。

夜間「学習・進路相談室」に通室した生徒の皆さんが、希望をもって、何度でも立ち上がる力を、身に付けることができるように、と祈っています。

南区教育相談室 「おおぞら教室の一年を振り返る」 後藤 恒

南区の適応指導教室（おおぞら教室）は南区役所味方出張所の中にあり、今年度7名の子どもを受け入れてきました。当初は通室生が少なく、子ども同士と一緒に活動する場面をあまり作れずにいましたが、夏休み頃から増え始め、次第ににぎやかになりました。

出張所からお借りしている土地に作った小さな畑（おおぞらファーム）でいろいろな野菜を育てました。収穫して昼食で食べたり、お土産として家に持ち帰ったりしました。また、野菜をおいしく食べられる献立をみんなで考え、調理実習もしました。サツマイモの蔓は乾燥させ、リース作りの材料として活用しました。

この一年、おおぞら教室では、担当職員が子どもとの相談を適宜行い、揺れ動く心の安定を図るとともに自己理解を促してきました。毎日の学習支援で学習の遅れを取り戻すことにも努めてきました。そして、学校との情報共有や行動連携を密に行い、子どもたちの学校復帰のきっかけを作ることができました。

これからも、子どもたちに寄り添いながら、全員が未来に向かって再び力強く歩み出せるよう、職員一同知恵を出し合い、支援に当たっていきます。



【サツマイモの調理実習】

けん玉で自信を



適応指導部 昔の遊び講師
結城 彰

ぐみの木教室で、昔遊びを担当して11年になりました。近年は、各区の教育相談室からも声をかけていただき、お邪魔する機会も増えました。

こま、お手玉、ビー玉、おはじき、けん玉などの遊びを教えています。日本けん玉協会の段位や指導員の資格を得ていますので、けん玉が専門になります。

けん玉は全身を使う運動ですし、集中力を高め、脳を活性化させます。そして、技を成功させるためには粘り強く取り組む必要があります。態度面や精神面にも良い効果があります。

けん玉の正しいやり方がわかれば、必ずできるようになります。今までできなかったことができるようになると誰でも嬉しくなります。多くの子どもたちは次の技ができるように挑戦を始めるようになります。技に応じて正式な級位の認定書をあげています。このような活動を通して、「できる」という自信をもたせたいと思っています。そして、不登校の解消やコミュニケーション力の向上に少しでも寄与できればと思っています。

調理経験を大切に



適応指導部 調理講師
笹川 トシ子

野菜を切ることが得意な人、調味料を計量することが得意な人、炒めることが得意な人、食器洗いが得意な人など、調理室で出会う人たちの得意作業はさまざまです。このような人たちがグループで調理をすると、どうしても得意な作業を選びがちです。すると、得意なことはどんどん得意になりますが、苦手なことはいつまでたっても苦手なままということになります。そこで、できるだけいろいろな調理作業を経験してもらうために、自分の分は自分で作るという形で作業を進めることにしています。そのため、子どもたちは不安を抱えながら作業を進めます。だからこそ料理ができ上がった時の達成感は格別だろうと思います。

子どもたちは今、衣食住に関しては大人に守られています。しかし、いずれは自立した生活ができることを求められてきます。現代はお金さえ出せば、簡単に食べ物を入手できますが、そのような時にこそ自信をもって料理しようと思う人になってほしいと願っています。さらに手作りの味を楽しむことができれば、なお嬉しいです。

コラム

寄り添うこと

家庭訪問を始めたこの日、その子には会うことすらできなかった。家族と少し話をしその日は終える。帰り際に一言「また来週くるねえ」とドア越しに告げ帰る。そんな日が何回も続く。

回を重ねると会えるようにはなった。まずは話を聴くといい（傾聴）。とはいうもののその心持ちはどうあればよいのか。内心、初めは何を話題にどう話したらよいのか戸惑い、私が不安を感じていた。

利休の茶室は、這って入るような狭い入り口。刀は外し、頭を下げて入らなければならない。だから人と人が向き合い、腹を割って話すことがで

きるのだという。私は何か気負ってどこか大人の価値だけを目指しながら訪問していたのかもしれない。気負わずにと思ったなら何か気持ちの寄り添い方が楽になった。

その日から訪問宅にいた猫に力を借りて猫を話題にした。猫の習性も生活も何も知らない私は質問していった。「…へ～え、そうなの。」興味深いことを次々と教えてくれた。教えてもらうことからのスタートで会話はささやかに進みしっくりいくようになってきた。そして少し先の話ができ、半歩先の目標も立てられるようになってきた。

春はどの子にとっても進級・進学の期待と不安の入り交じった不安定な時期。次に飛び立つための準備ができるまでそっと不安な心に寄り添っていこう。

(訪問教育相談部 渡辺 明子)